

アーチルでの 家族支援事業

仙台市北部発達相談支援センター(北部アーチル)

企画総務係 成見憲介





～ 本日の報告内容 ～

1 これまでの経過

- (1) アーチル家族会について
- (2) 発達障害者家族支援事業への移行

2 発達障害者家族支援事業について

- (1) 課題の整理
- (2) 解決方法
- (3) 家族教室
- (4) 家族交流サロン
- (5) 今後の課題

3 おわりに





1 これまでの経過



(1) アーチル家族会について ①

～ 家族会発足の目的 ～

(アーチルにおける家族支援)

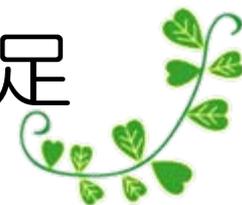
(目的)

高機能発達障害者への支援手法を探るため、
アーチルで開催していた、当事者グループ参加
者の保護者を召集。日頃抱えている思いや、
行政に求めることなどをヒアリング



・ 平成16年2月

高機能自閉症青年グループ家族会 が発足



(1) アーチル家族会について ②

～ 参加者の意識変化 ～

- 初めは対職員の意見交換等が中心だったが、回を重ねる毎に、参加者がお互いの体験や思いを話し合い、共に励まし合う時間となっていっていった。



- 参加者「ここに来て皆と会うことで、また来月まで頑張っていく力がもらえる」と、**お互いのつながりを大切にしたい**という意識も強まる。



- 改めて、保護者の言葉から、現状の課題を整理し、家族支援の拡充を図る。



(2) 発達障害者家族支援事業への移行 ～さらなる支援の拡充へ向けて～

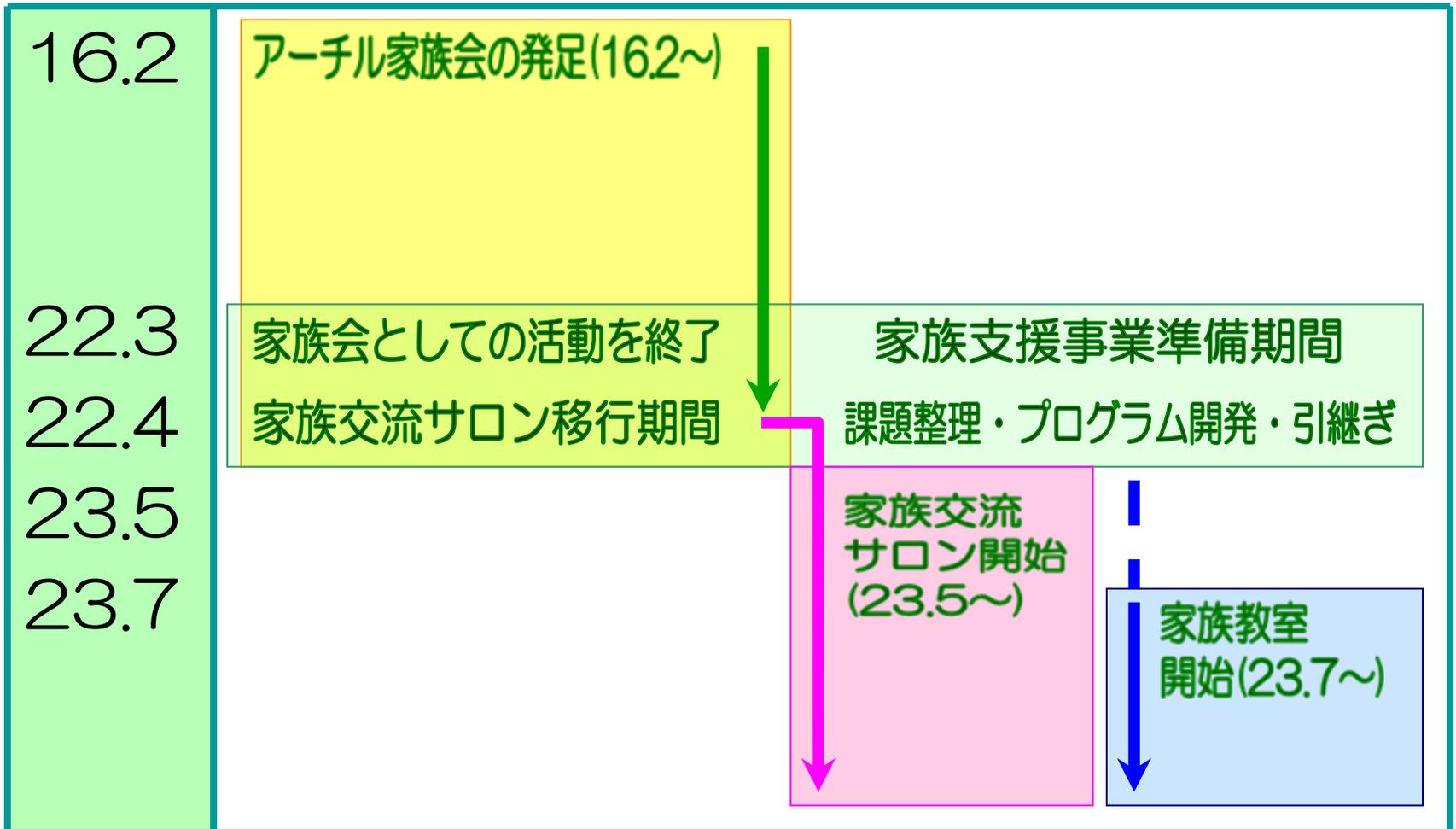
個別相談やアーチル家族会だけでは不足している「**発達障害を知ったばかりの保護者に対する支援プログラムの開発**」も含め、高機能発達障害者の家族が、地域で主体的に暮らして行けるよう、家族が自ら力を取り戻していく過程を支える**支援手法の開発**を重点的に進めることになった。



平成22年度～ **家族支援事業**の始動へ



(表1) アーチルの家族支援の経過





2 発達障害者 家族支援事業について



(1) 課題の整理 ①

～ 障害を知ったばかりの保護者の言葉から～

- 家庭でのより良い対応の仕方や、将来の自活に向けて活用できる制度など、**発達障害のことや社会資源などについて知りたい**という意見が最も多かった。



- これまでどこに相談して良いか分からず、本人だけでなく保護者も社会的に孤立し、パワーレスな状態に置かれている。



(1) 課題の整理 ②

～ 旧アーチル家族会 参加者の言葉から ～

- ・最新の社会資源や支援等についての情報に関心を持ちつつも、保護者自身がありのままの自分を受け入れてもらえる **交流の場** を求めている。



- ・同じような体験を持つ相手と、お互いに共感し、励まし合える関係性を大事にしたいという意識を持っている。



(1) 課題の整理 ③

～ 発達障害の診断を受けて間もない
保護者の苦悩を7項目に整理～

※アーチルでは、乳幼児・学齢・成人の全ライフステージ
を通した 家族(保護者)支援を行っている

障害の認識 (個性ではなく本当に発達障害なのか)

感情の葛藤 (障害の現実を知るが、感情的に受け止められない)

本人理解と対応 (本人とどのように向き合うか)

将来の展望 (本人はこの先どんな人生を歩むのか)

ライフステージ共通

本人の自己理解 (本人が障害を受け止め、生活して行けるか)

親子の関係性の改善 (双方上手くいかない関係性が固着している)

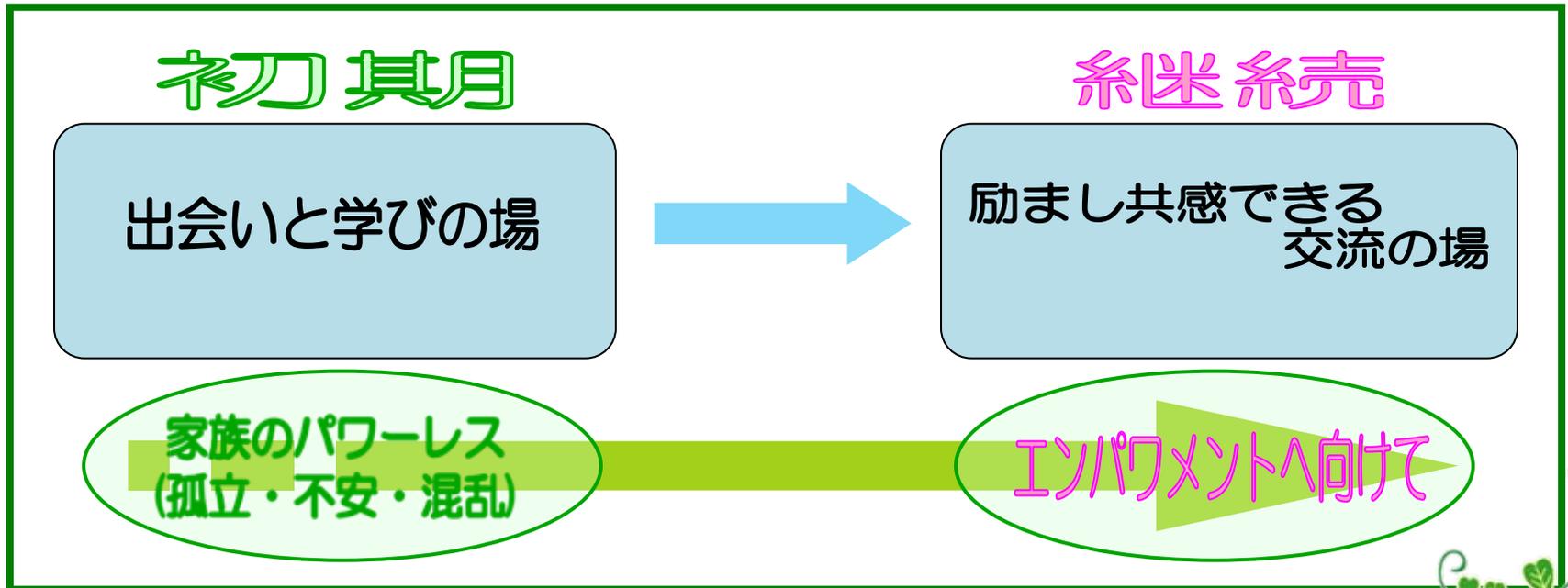
本人の自立と社会参加 (親の高齢化→親からの自立が身近なものとなる)

成人期特有

(2) 解決方法 ①

～ 初期段階から継続への段階的な支援 ～

- 家族(保護者)が置かれているパワーレスな状況から、エンパワメントの過程を段階的に支援できる場が必要



(2) 解決方法 ②

～支援プログラムに担保すべき4つの機能～

- ① 障害や社会資源についての情報提供
- ② 同じような経験を持つ保護者と出会い、孤立感を緩和する
- ③ 他の保護者の経験に触れ、保護者自身や、自分の家族を振り返る機会を増やす
- ④ 保護者が本人のプラス面に着目し、両者の関係性を再構築する契機の提案

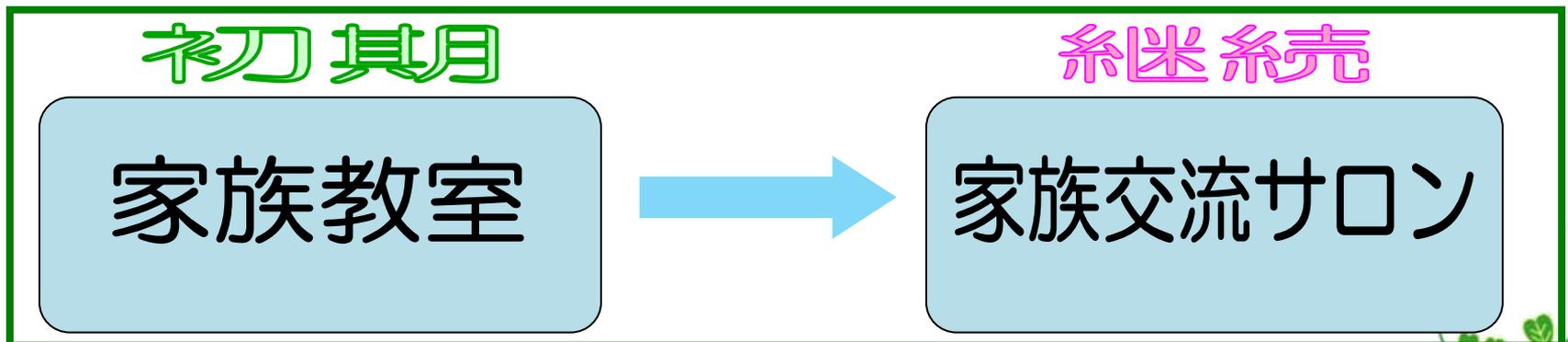


(2) 解決方法 ③

～ 集団を活かした支援の展開 ～

- ・ 「家族教室」 「家族交流サロン」という2つの集団支援の場を設け、前述の4つの機能を持たせる
- ・ 集団の場での保護者の意識変化を、個別支援にもつなげていく(集団のダイナミズムを活用)
- ・ 委託先：NPO法人 ピアリンクセンター **ここねっと**

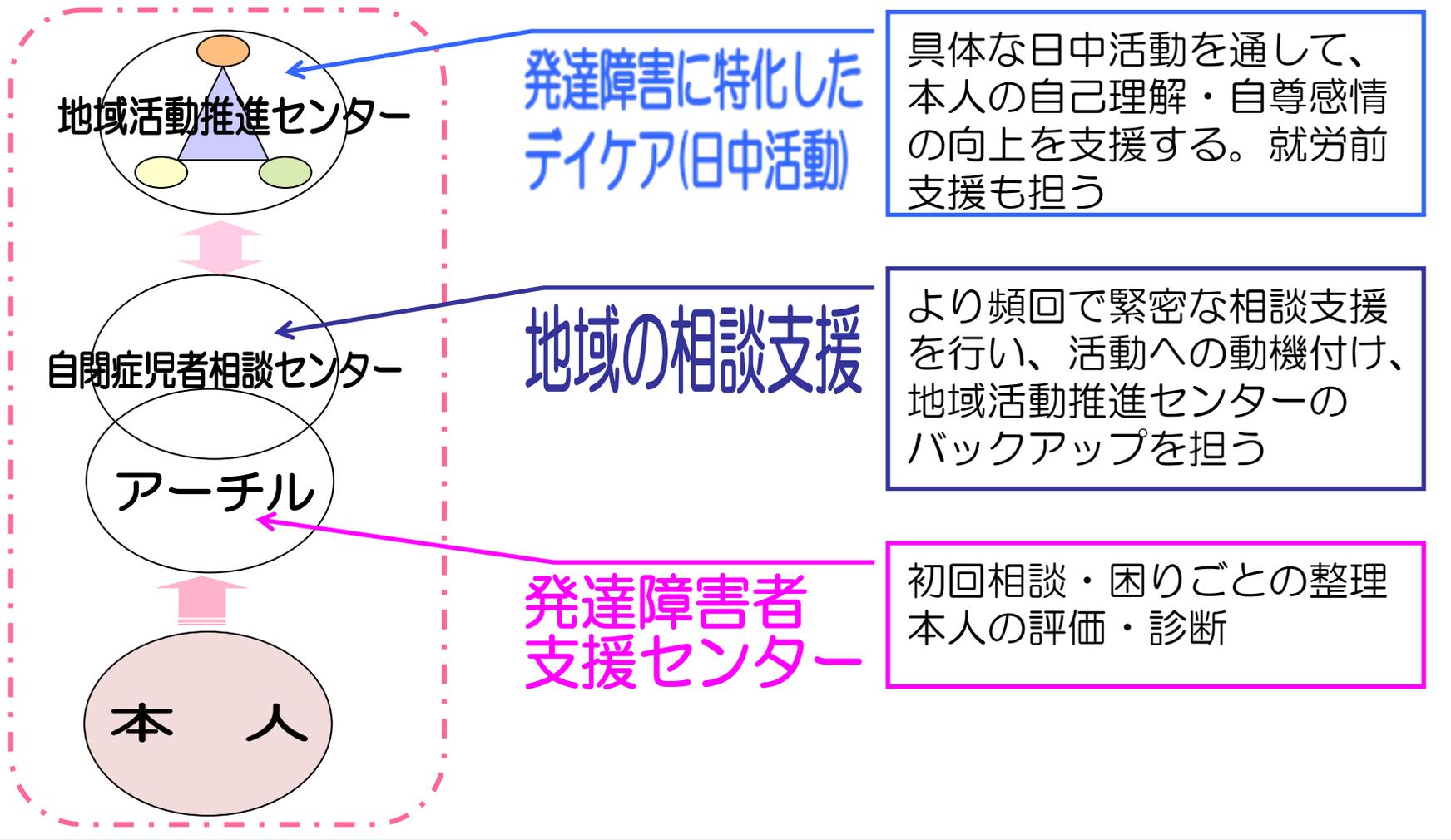
※自閉症児者相談センター(後出)の受託法人



(2) 解決方法 ④

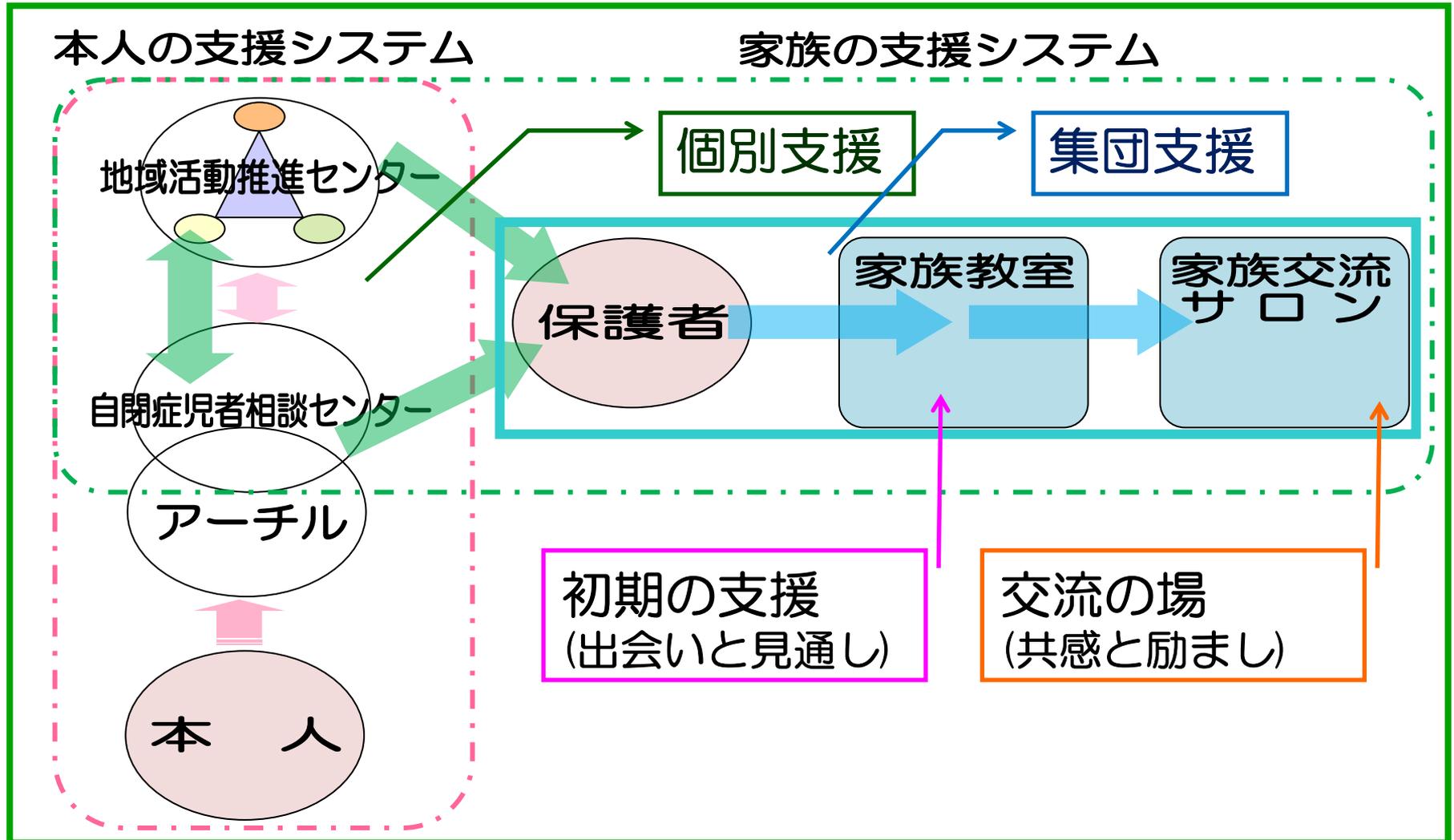
～ (参考) 本人の支援システム ～

本人の支援システム



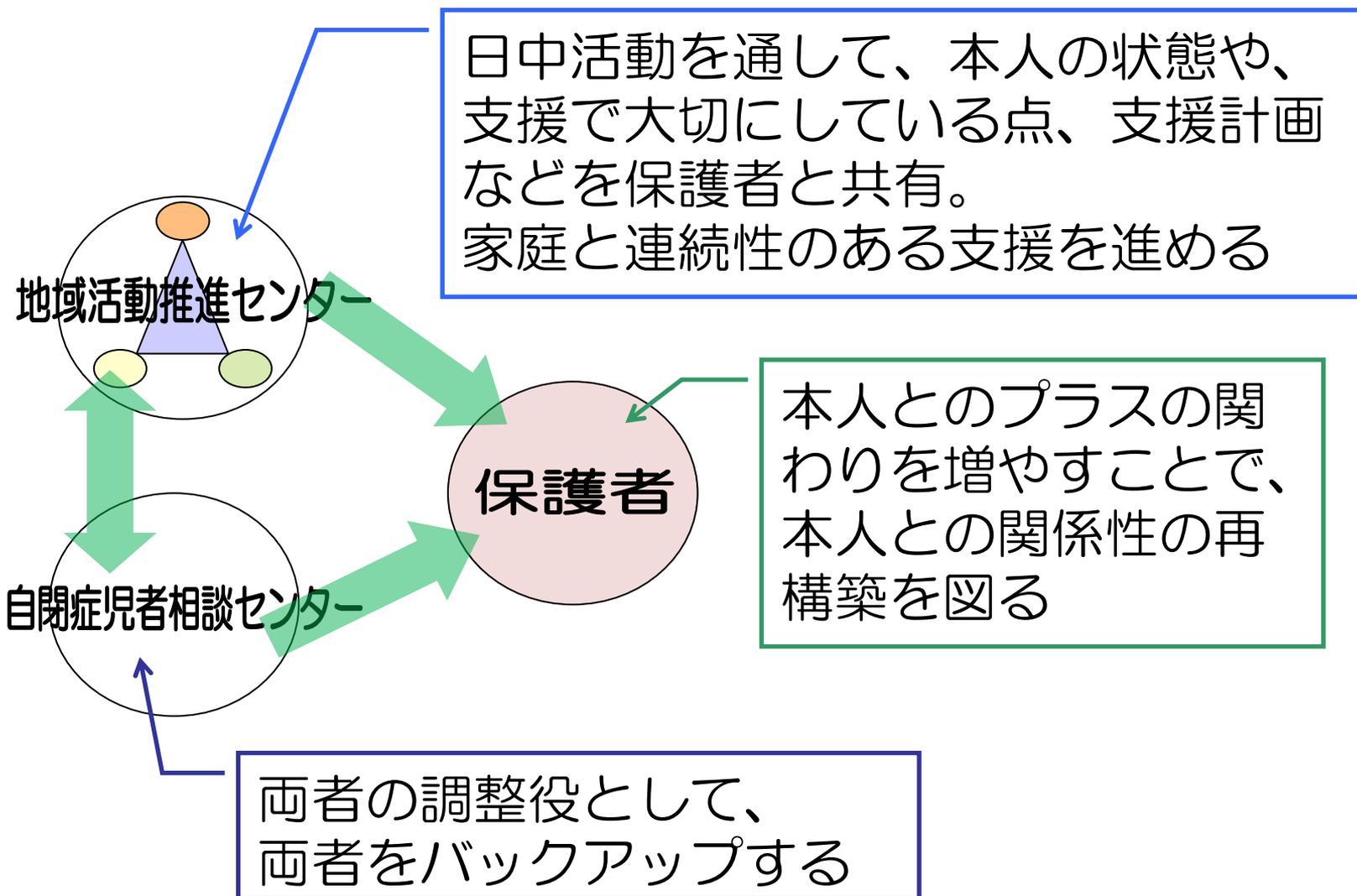
(2) 解決方法 ⑤

～ 支援システムへの位置づけ ～



(参考) 個別支援について

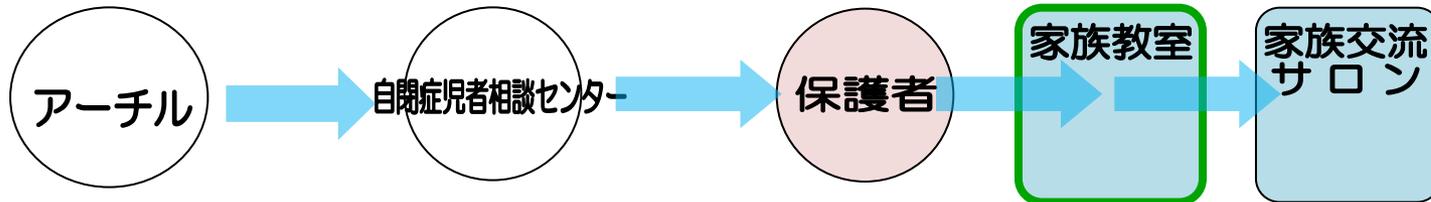
～支援機関と家庭の連携～



(3) 家族教室 ①

～ キーワードは「出会い」～

平成23年7月からスタート



- ・ 目的：同じ様な体験を持つ保護者同士の出会いを通して、保護者自身が今後の見通しを持てるよう支援する。
- ・ 期間：年度単位(有期限)
平日もしくは土曜日開催



(3) 家族教室 ②

～ 教室の対象と参加者像 ～

- ・ 対象：発達障害について知ったばかりの保護者
(個別相談から参加希望者を募集)
- ・ 参加：希望者は全19名
40～60代で就労中の母親が中心
少数だが父親の姿も見られた
(子の年齢は10代後半～40代前半)



(3) 家族教室 ③

～ 大切にすべき視点と方向性 ～

- 同じような経験を持つ保護者同士の出会いを通して、孤立感を緩和する
- 先輩保護者の経験に触れることで、改めて自分の家族のあり方について考えるきっかけを得る
- 成人期の発達障害者や支援者との出会いから、今後の本人の社会参加や支援のイメージを持てるようになる
- 発達障害についての情報を得て、本人の特性理解に基づいた対応の仕方を学ぶ機会を得る
- 就労を含めた社会参加の方法や、親亡き後の生活に備えて活用できる社会資源の情報を得る



(3) 家族教室 ④

～ 平成23年度のプログラムの内容 ～

7月	よく分かる！成人期の発達障害・11名
8月	生きづらさとそのメカニズムについて・8名
9月	事例から学ぶ 支援制度について・8名
10月	家族グループ懇談会 (家族交流サロンとの合同企画)・13名
11月	地域活動推進センターの取り組み・5名
12月	自分らしく働くこと(当事者の体験報告)・6名
1月	法的な相談と解決について(弁護士の話)・7名
2月	(予定)①金銭管理と人生設計 ②振り返り

※一方的な座学形式にならないよう、参加者の近況報告や、前回参加しての感想、質疑応答を交えて進めていく



(3) 家族教室 ⑤

～ 評価の視点と方法 その1 ～

1 保護者の意識変化から

- ① 保護者の孤立感が緩和されているか
- ② 保護者の不安が軽減され、先の見通しが少し持てるようになってきているか



保護者の意識変化については、教室等での発言や
毎回のアンケート調査から把握する

- ① 前回の振り返り
- ② 今回参加しての感想
- ③ 新たな気づき(発見)
- ④ 教室への要望、次回取り上げて欲しいテーマなど



(3) 家族教室 ⑥

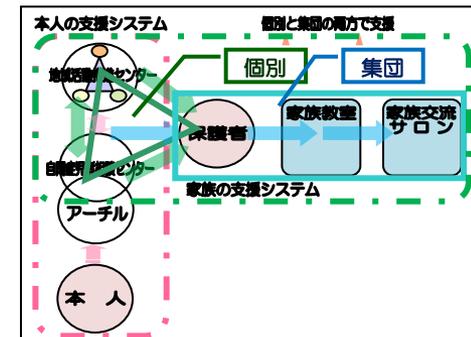
～ 評価の視点と方法 その2 ～

2 支援システムの稼動状況から

- ① 本人と家族(保護者)に対する支援が、分断せずに機能しているか
- ② 家族(保護者)に対する個別と集団の支援が、互いに連動して機能しているか



(案) 個別面接等で保護者の声を拾い
そこでの声と集団の場の発言を
つなげながら整理・分析し、
連動性を考察する



(3) 家族教室 ⑦

～ アンケート(その1)

主な参加の動機について～

- ・ 家庭での対応に孤軍奮闘。他の家族がどうしているのか知りたい
- ・ 親として、本人が将来生きて行ける道を見つけてやりたい
- ・ 自分の育て方が正しかったのか？知りたい
- ・ 知識を深めて本人の自立につなげたい



(考察)

孤独感、悩みを抱えながらも「これから本人のために、親としてできることを探したい」という思いが感じられる



(3) 家族教室 ⑧

～ アンケート(その2)

障害や社会資源の情報を得て～

- ・ 少しいことが、本人にとっては大きな障害になっていると思った
- ・ 「自分は今後どうしたいのか」先のことを考える機会を与えられた
- ・ 「治す」という考え方では無いと感じた
- ・ 周囲への理解を深めていくことの重要性を感じた
- ・ 本人が制度を利用して、今後生きて行ける方向を見つけない
- ・ 社会制度に頼る・頼らないに関わらず「親として子どもの為になが出来るか」を考え直したい



(考察)

本人を理解したうえで、改めて親としてできることを考えようとする意見が多く見られた



(3) 家族教室 ⑨

～ アンケート(その3)

教室でほかの保護者と出会って～

- ・ みんな同じような悩みを持っていたので安心した (同意見が最多数)
- ・ 自分の思いを整理できた。教室は「オアシス」のような場所
- ・ 同じ悩みを抱えている方の話に共感し、勇気をもらえる
- ・ 自分より深刻な方がいた。少しでも支えになってあげたい
- ・ 悩みを吐き出して、多様な考え方を知る機会になっている
- ・ 当事者のみに通じるものを感じた
- ・ 参加する保護者同士で、具体的な悩みや解決方法を話し合いたい



(考察)

安心感や共感など「出会い」の効果が確認された



(3) 家族教室 ⑩

～ アンケート(その4)

先輩保護者の経験に触れて～

※10月の合同懇談会で、先輩保護者との交流を受けて

- ・先輩保護者に「待つこと」「本人を信じること」の大切さを学んだ
- ・本人への対応の仕方を先輩から聞いて、参考になった
- ・「『大丈夫』と本人に言いながら、実は自分に言い聞かせてきた」という先輩保護者の言葉が胸に沁みだ
- ・自分の子どもにも真剣に向き合って頑張っていることに感動した
- ・また、先輩保護者と交流を持ちたい



(考察)

先輩保護者の経験が、参加者へのエールとなっている



(3) 家族教室 ⑪

～ アンケート(その5)

本人と関係性が改善しているか～

- ・ 診断を知る前の本人への対応を反省。本人の良い所を見てやりたい
- ・ 本人は長いこと悩んできたのだろうと反省。少しでも理解したい
- ・ 子どもを大事に思いつつ、対応しなければならぬと実感した
- ・ 心配は尽きないが、「この子は大丈夫だ」と信じて行きたい
- ・ 先輩保護者から、本人への言葉のかけ方など「なるほど」と思う話がたくさんあった。さっそく実行したい
- ・ 道は遠いと感じるが、できることからやって行きたい



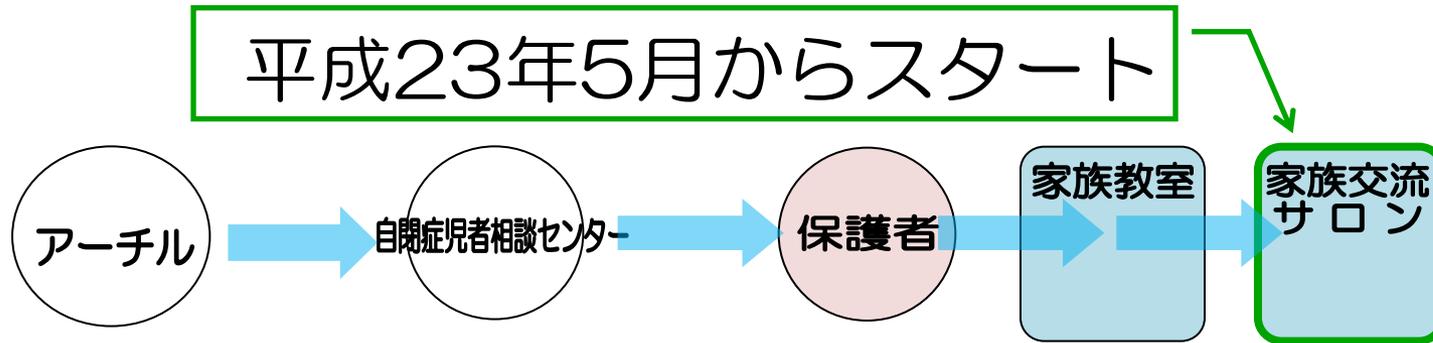
(考察)

本人との関わり方を見直し、新たに取り組もうとする姿勢が表れている



(4) 家族交流サロン ①

～ キーワードは「交流の場」～



- ・ 目的：参加者同士が共感と励ましを通して、自己評価の回復を図るとともに、本人と家族が安心して暮らすための支援を考える端緒とする
- ・ 期間：無期限
(家族教室と同日開催)



(4) 家族交流サロン ②

～ サロンの対象と参加者像 ～

- ・ 対象：同じような体験を持つ方との交流を希望する家族(保護者)
(家族教室参加者に紹介)
- ・ 参加：登録者は30名
旧アーチル家族会の参加者が中心で
毎回の参加は10名前後
50～70代のシニア世代の
母親が多い



(5) 今後の課題 ①

～ 保護者が自主的に活動できる支援 ～

- ・家族交流サロンでは、支援者が参加者の意見に基づき、発達障害者と家族が地域で安心して暮らすためのサービスやネットワーク等を、関係機関と共に考える端緒としてきた



- ・今後は参加者の**自主的な活動**を後押しする支援が、家族支援のもう1つのスキームとして検討すべき課題となっている。



(5) 今後の課題 ②

～さらなるエンパワメントへ向けて～

- ・本人同様、保護者に対する支援においても、エンパワメントの過程には、1つずつ成功経験を積み重ねていくことが重要。保護者が必要とすることを、同じ意識を持つ仲間とともに発信し、その実現へ向けて主体的に行動できるよう支援する



- ・企画から実施まで参加者主体で進めることや、より多くの方々に貢献できる経験等、外部に開かれた活動の視点も必要



3 おわりに ①

- ・年間の成人相談の件数は、平成14年のアーチル開設当時と比べ、**約2倍**に増加
- ・今後も支援を必要とする本人とその家族が、さらに増えていく見込み。本事業もさらなる拡充が求められる
- ・将来的には集団支援の場を、より地域に近い所で開催し、保護者が参加しやすく、幅広い活動ができるような展開を目指す



3 おわりに ②

